

「もつとも、その心配は杞憂だきゆうと思うのだが、どうだ。前に背中せなかの傷を治してやったのを忘れたか」

バゼットは赤くなつた顔を伏せて言峰に背を向けた。忘れるはずはない。瀕死の重傷を負つた自分を言峰は身を挺ていして助けてくれた。あのときも確か、いつまでも接していたと思ひ、離れるのがつらかつたはずだ。

自分の裸身を眺めても平然としている言峰が憎らしくも思えてくる。子供のようにからかわれていることに憤いらいつてしまうのは、やはり自分は女として見られたいと望んでいるのかもしれない。だが自分にはその資格がないのも承知しるしていて、その差がひどく齒痒はがゆかつた。

言峰は自身の評するとおり悪趣味だとバゼットは思う。みずからの行為に対する他人の反応を推し量り、愉たのしむきらいがある。しかも中身は悲しみや苦痛といった負の事象ばかりだ。そうかと思えば人の命を助けてみたり、正しい道を教えてもくれる。粹にはめられない人間だとは判っていたが、本当に人となりをつかめない。

シャツを脱ぎ、あらわになつた背を、濡れた感触がすべていく。素肌に触れてくる手を通して、考えあぐねていることを言峰に知られてしまうようだ。

「私のことはいいですから」

バゼットはそう言つて背中を丸め、胸を両腕で隠した。

「貴方は一人で行ってください」

必死の言い草に、言峰が背後で笑いを洩らした。

「その言い方はうまくないぞ——おまえを置いていくわけにはいかないと言つてほしいのだろう、マクレミッツ。私を引き止めたいのなら、もつとうまい理由を考えるのだな」

目をきつく閉じた。知られている。言峰には自分の本心や欺瞞きまんなど、とうに見抜かれていた。そして、否定しながらも捨てきれずにいた望みでさえ。

言峰の言葉が心を剥がし、傷をつける。その傷口から差しこんでくる新しい光明。自分は言峰を知つてからずっと、この感触を追い求めていたのだ。

バゼットは自分で身を抱いた。我慢しきれず、顔を下に向けて身体を縮めてしまう。起きたときから感じていた寒気が今は身体全体を震わせるまでになっていた。歯の根がかわず、口元から細かい音があがる。

「気分が悪くなつたか」

「わかりません。急に寒くなってきて……」